

女子大学生の進路決定と対人環境の関係 (2)

—女子大学生の進路決定に影響を及ぼす情緒的／道具的サポート源に関する検討—

○山下倫実 (十文字学園女子大学)

風間文明 (十文字学園女子大学)

キーワード：進路決定, ソーシャル・サポート

問 題

就職活動においては、友人 (同性／異性) や親しい先輩からの就職関連情報を利用し、大学の先生や就職課からの就職関連情報を重視する (下村・木村, 1994) など、身近な人々から提供される道具的サポート (以後, SP) の利用を予測させる結果が得られている。また、就職活動においては限られた時間の中で自分にふさわしい職業を選び、試験や面談による厳しい選抜に臨む必要があり、このようなストレス状況では周囲の人の理解や励ましといった情緒的 SP は欠かせないだろう。ただし、家族や友人、先輩などの関係性によって SP の内容に違いがある可能性が指摘されている (下村・木村, 1997)。そこで、本研究の目的は、誰から受ける SP が就職活動開始前の学生の進路決定において効果を持つのか検討することである。その際、進路決定の確信度だけでなく、就職活動で起こる予定外の事態に臨機応変に対応する柔軟性についても考慮する。

方 法

<調査対象者>

女子大学生 90 名を対象。平均年齢 20.88 歳 (SD = 0.72)。大学 3 年次で、調査時期は 2016 年 1 月中旬。<質問項目> 1) 進路決定に対する意識：風間・山下 (2016, 日本教育心理学会第 58 回総会) と同様の尺度を用いた。

2) 情緒的／道具的 SP 源：情緒的 SP は、「就職活動中にあなたの選択や取り組みを信頼し、あなたの抱える悩みに共感を示し、あなたを支え励ましてくれる人は何人ですか？」と尋ね、友人、親しい異性、先輩、家族、先生、就職課、社会人という関係性ごとに人数を回答するよう求めた。道具的 SP については、「就職活動で生じた問題や困ったことに対処するための、必要な情報や役に立つ知識を与えてくれる人は何人ですか？」と尋ね、同様に回答を求めた。

結果と考察

表 1 に各 SP 源として挙げられた人数に関する記述統計を示す。情緒的／道具的 SP 源共に友人が最も多く挙げられ、次いで家族、社会人や先生の順となった。

表 1 各 SP 源として挙げられた人数 (n=90)

	情緒的 SP		道具的 SP	
	平均値	SD	平均値	SD
友人	6.21	4.18	3.80	2.68
親しい異性	1.82	1.69	1.00	1.07
先輩	1.49	1.56	1.37	1.55
家族	2.70	1.39	1.82	1.40
先生	1.78	1.98	1.59	1.41
就職課	1.24	1.37	1.41	1.41
社会人	1.97	2.33	1.49	1.90
合計	17.21	8.94	12.48	5.96

次に、大学生の進路決定 (確信度／柔軟性／浮動性) を基準変数とし、SP 源として挙げられた総数、7 種類の関係ごとの SP 割合を説明変数としたステ

ップワイズ法による重回帰分析を実施した。なお、分析は情緒的 SP 及び道具的 SP ごとに実施した。

情緒的 SP 源について、投入された変数と標準偏回帰係数を表 2 に示す。

表 2 情緒的 SP 源が進路決定に及ぼす影響

	標準 偏回帰係数	平均値	単相関 係数
進路決定に対する確信度			
情緒 SP 教員割合	.322 **	10.81	.265
情緒 SP 社会人割合	.231 *	10.10	.151
進路決定に対する柔軟性			
情緒 SP 教員割合	-.329 **	10.86	-.359
情緒 SP 就職課割合	.167 †	6.86	.224
進路決定の浮動性			
情緒 SP 教員割合	-.360 **	10.86	-.301
情緒サポート合計	-.276 **	17.21	-.254
情緒 SP 就職課割合	-.168 †	6.86	-.132

解析の結果、確信度の分析における説明率は 12.0% で、説明率の検定は 1% 水準で有意であった ($F=5.88$, $df=2, 86$)。また、柔軟性の分析における説明率は 15.6% で、説明率の検定は 1% 水準で有意であった ($F=8.01$, $df=2, 87$)。さらに、浮動性の分析における説明率は 20.1% で、説明率の検定は 1% 水準で有意であった ($F=7.21$, $df=3, 86$)。結果より、情緒的 SP を提供する教員割合が高いほど、進路決定の確信度は高くなり、柔軟性や浮動性は低くなった。また、情緒的 SP を提供する社会人割合が高くなるほど、進路決定の確信度は高くなり、就職課の割合が高くなるほど、柔軟性は高くなるが、浮動性は低くなるという傾向が認められた。道具的 SP 源について、投入された変数と標準偏回帰係数を表 3 に示す。

表 3 道具的 SP 源が進路決定に及ぼす影響

	標準 偏回帰係数	平均値	単相関 係数
進路決定に対する柔軟性			
道具 SP 異性割合	-.194 †	7.10	-.194
進路決定の浮動性			
道具 SP 異性割合	-.318 **	7.10	-.318

解析の結果、確信度については投入される変数がなかった。柔軟性の分析における説明率は 3.8% で、説明率の検定は 10% 水準で有意傾向にあった ($F=3.42$, $df=1, 87$)。また、浮動性の分析における説明率は 10.1% で、説明率の検定は 1% 水準で有意であった ($F=9.75$, $df=1, 87$)。道具的 SP を提供する親密な異性割合が高いほど、進路決定の柔軟性や浮動性が低くなることが示唆された。

以上より、大学組織内での学生支援を考える場合、進路決定の確信度を支える教員と、予期せぬ事態への柔軟性を支える就職課を両輪とした情緒的サポート体制が、就職活動前には有効に機能する可能性がある。

(本研究は、H27 年度十文字学園女子大学のプロジェクト研究費の助成を受けて実施された)